

カナダ英語の背景*

——カナダの暮らしと言語（その5）——

浅 田 壽 男**

I はじめに

すでに一連の拙稿（2011, 2012 a, 2012 b, 2013）の冒頭でも述べたように、「言葉の背景にあるものを見ることは、言葉の理解を何より深めさせてくれる」という観点から、本稿は、それらの拙稿の趣旨を引き継ぎ、カナダ英語のより一層の理解のために、筆者自身がカナダのトロントに滞在した半年間の日常生活¹⁾から得た体験や知見をもとに、カナダの言語ならびにその日常生活や風俗・習慣のいくつかを取り上げて、特に我が国では知られていない側面を中心に論じたものである。例えば、上山・井上（1993）の冒頭には「言語や文化はその国の歴史、気候や地理的な条件、社会、政治、経済、文化、教育等と密接な関連がある。また国民の生活とも関係があり、これらははなれて言語や文学は考えられない。一つの単語や文章にも、それを使ってきた国民の歴史、文化が反映している。従って我々が言語や文学を研究するに際して、その背景を考察することは大切なことである」と述べられているが、奇しくも拙稿と趣旨を同じくしている。このように本稿の目的は、カナダ英語の背景について、個人の体験という限界や偏りは避けられないにしても、従来の書物の上の限られた知識や巷間の不十分な情報を補完したいということにある。巷にはカナダの紹介や風

物地誌に関する文献、研究書も少なからずあるが、少なくともこれまでの文献や巷間の情報を補うという意味で、本稿もいささかの意義はあろうと思う。

II カナダの暮らしと言語

1. カナダ英語の中のアメリカ英語

カナダ英語にはイギリス英語の規範とアメリカ英語の規範が併存しているので、様々な表現においていずれの規範に従っているのかを知ることは極めて興味深い。

すでに一連の拙稿の中で、イギリス英語の規範に基づく語彙や表現と、アメリカ英語の規範に基づく語彙や表現を個々に取り上げて来たので、本稿では引き続き、アメリカ英語の規範に基づくカナダ英語の語彙や表現について、これまでに取り上げられなかったものを、以下に述べることにする。

1.1 綴り字の簡素化

アメリカ英語に特徴的な「綴り字の簡素化」はカナダでも一般的になっている。

筆者が暮らしたヨーク大学キャンパス内のアパートではテレビがケーブル・テレビの放送を受信していた。その005チャンネルは「Rogers チャンネル」で、ここは番組の案内専門であり、全てのチャンネルの番組内容を、24時間休み無く、

*キーワード：カナダ英語、カナダの日常生活、カナダの伝統と文化

本文に掲載の写真は全て筆者自身が撮影したものである。

**関西学院大学社会学部教授、関西学院大学大学院言語コミュニケーション文化研究科教授

1) 本学の学院留学制度による支援を受けて、2010年3月22日から2010年9月20日までの半年間、カナダのオンタリオ州トロントにあるヨーク大学・英語学部（Department of English, Faculty of Liberal Arts and Professional Studies, York University）に客員研究員（Visiting Scholar）として滞在し、トロントで暮らす機会を得た。なお、この時の研究内容とその成果については、別途、『2010年度 研究成果報告』（2011年9月15日、関西学院大学研究推進社会連携機構発行、pp.15-16）で公表した。

その時点での1時間分をテロップ形式で紹介している。その Rogers チャンネルの画面の左上隅には、これまた常時、同じくテロップ形式でその日の天気予報が流されている。

この天気予報は3日分を、その日の「夕刻、夜間、午前」に分けて表示しているが、「Eve/Nite/Mor」と表記している。つまり「夜」は Night ではなく、Nite とアメリカ英語式に簡素化して表記されている。これに関連して、伊丹（1980）は次のように述べている。

- (1) 発音と語彙の種類のみからは米語寄りのカナダ英語ではあるが、学校教育では伝統的に英国寄りで、nite, thru, dialog のような綴字の簡素化を好まず、文構造や文章論も形を崩さない姿勢を取っている。一同、p.34—

つまり伊丹（1980）は「学校教育では」と但し書きを付けているものの、カナダ英語では nite のような簡素化された綴り字は好まれないとしているが、この当時から優に四半世紀を過ぎた今、一層、アメリカ英語がカナダ英語に浸透したと考えられる。

なお、拙稿「カナダ英語の背景—カナダの暮らしと言語（その4）—」（2013：63–64）で略語の sox を取り上げたが、それもここで取り上げたアメリカ英語の語法を追随する「綴り字の簡素化」の一例である。



写真1 Rogers Centre 付近を走る路面電車
(2010年8月29日撮影)

1.2 「持ち帰り」の表現

ファーストフード店での「持ち帰り」を、カナダでは、アメリカ英語式に to go とか take out と言う。しかしイギリス英語式に take away と言っても、たいていの場合、問題なく理解してくれる。

1.3 コーラを表す「coke」は避けられる

清涼飲料水の「コーラ」は、日本とは違って「ペプシ」と呼ばれるのが一般的のようである。周知の通り、ペプシ・コーラにしる、コカ・コーラにしる、いずれも米国製2大清涼飲料であるが、「コーク」や「コーラ」はコカインの隠語として用いられるから、語感が悪いのでペプシと呼ばれるのではないかと思う。

- (2) coke noun [U] 1 (informal) = COCAINE —OALD
7

たとえ「コカ・コーラ」しか置いていない店であっても「コーク」と略称せず「コカ・コーラ」と呼んでいた。

1.4 「おむつ」の表現

カナダのテレビCMを見ていた時、「おむつ」は、イギリス英語式に napkin とか nappy と呼ばずに、正にアメリカ英語式に diaper と呼んでいた。

1.5 「路面電車」の表現

イギリスでは路面電車を tram と呼ぶが、カナダではアメリカ英語式に streetcar と呼んでいる。

1.6 「地下鉄」関連の表現

トロント市内を縦横に走る TTC（トロント交通局）地下鉄は、イギリス英語では underground、



写真2 TTC 地下鉄、バス、路面電車に共通の token
(メダル状の乗車券)の表裏
(2010年8月18日撮影)



写真3 TTC 地下鉄 Museum 駅の構内風景
(2010年3月25日撮影)



写真4 TTC 地下鉄の車内
(2010年8月3日撮影)



写真5 TTC の transfer (乗り換え券)
(2010年4月20日撮影)



写真6 Bay 駅構内にある transfer の発券機
(2010年8月26日撮影)

特にロンドンでは tube と呼ぶが、ここカナダではアメリカ英語式に subway と呼ぶ。面白いことに、その subway の駅構内にある「足下に注意」の掲示は、すでに拙稿(2012a: 65-66)で述べたように、イギリス英語式に「mind the gap」と書かれている。

なお、この地下鉄に関連する表現で、アメリカ英語にもないし、イギリス英語にもない語彙として token があるが、これは TTC 地下鉄を中心に、バスや路面電車にも共通に使えるメダル状の乗車券のことである。写真2を参照のこと。

2. 「バーゲン」と同義の promotion

日本では一般に promotion というに「昇任、昇格」といった地位や階級が上がる意味に用いられることが多いが、各地の商店街でよく耳にする promotion という言葉は、全く bargain や special price, special sale と同義で使われている。この意味の promotion は決してカナダ英語独自の用法というわけではないが、トロントで暮らした日々の中で気づいたことなので、ここで取り上げることにした。

トロントの繁華街 Bloor 通りにあるルーツ(Roots)²⁾でバッグを買おうとした時、店員がショ



写真7 繁華街 Bloor 通りのルーツ
(2010年8月26日撮影)



写真8 promotion を知らせるルーツの掲示
(2010年8月29日撮影)

ケースの上に置いてある1個2ドルほどの缶入りキャンディーをぜひ買えと言う。そのキャンディーを買えば、バッグ1個なら50ドル、バッグ2個なら100ドル値引きすると言うのである。意味がよく分からなかったのも、なぜキャンディーを買えば100ドルも値引きするのかを彼女に尋ねたところ、今、この店で promotion をやっているの、200ドル以上を購入する毎に50ドルの値引きをしているというのである。つまり200ドルにわずか足りないの、キャンディーを買えば200ドルを越えるので、50ドルの値引きをするのだと、親切に教えてくれた。つまりこの時の promotion は、日本で言うところの「特売」や「バーゲン・セール」に当たる意味で用いられていることが分かった。

もちろんいくつかの辞書類には「販売促進」という記載が見られ、中には「販売促進のためのプレゼントや宣伝」などと記述して、微妙な意味の重なりを示しているものの、上に述べたように bargain と同義語で用いられている現実を明示しているとは言い難い。

なお、ある時、テレビのCMで見た便利グッズが欲しくなり、近所の Centerpoint Mall に入っているデパート「Zellers」(なお、Wikipedia 英語版の情報によれば、ミシサガに本社があり、カナ

ダ全土にチェーン店を持つ Zellers は、残念ながら2012年に閉店し、米国系企業の Target Canada 社が買い取ったとのことである)に行き、テレビで通信販売していた商品があるのかを尋ねた時、店員から promotion の品は2階のコーナーで探してほしいと言われたことがある。この場合の promotion は、一般的に辞書に記載されている「販売促進」の意味に近い。

3. 政治形態の日加の相違—「カナダ総督」—

改めて言うまでもなく、第2次大戦以前には、1889年に制定された「大日本帝国憲法」、いわゆる「明治憲法」の下に、天皇が元首であり、国政の全てを一手に掌握したが、戦後は、1946年に制定された現「日本国憲法」によって天皇は「日本国の象徴」(第1条)とされ、国家的儀礼に関わる行為を行うのみで、国政に関する権能を持たず、専ら政治は議院内閣制を採って現在に至っている。

一方で、カナダは立憲君主制を採り、総選挙で選ばれる連邦政府の首相が実質的な統率者で、議院内閣制により上院と下院から成る連邦政府とそれぞれの州政府で実際の政治が行われているが、カナダの国家元首は英国女王エリザベス2世であり、その代理として「カナダ総督」(Governor Gen-

- 2) 1973年創立のカナダを代表するカジュアル・ブランドで、バンクーバー・オリンピックの時のカナダ代表チームのユニフォームを手がけて、一躍有名になった。カナダ全国に店舗があり、トロント市内に限っても100 Bloor St. W.にある店舗の他にイートン・センター(The Eaton Centre)にも、プロムナード・マーケット(Promenade Market)にも、方々に店舗を持っている。



写真 9 オタワの国会議事堂前で
(2010年6月19日撮影)



写真 10 国会議事堂内の議場
(2010年6月20日撮影)



写真 11 リドー・ホール玄関の表札
(2010年6月22日撮影)



写真 12 リドー・ホールの噴水前で
(2010年6月22日撮影)



写真 13 ミカエル・ジャン総督が小学生の記念撮影に
飛び入り参加。(2010年6月22日撮影)



写真 14 同左
(2010年6月22日撮影)

eral) が任命され、エリザベス女王 2 世の代理を果たしている。

首都オタワには、Wellington St. に面して国会

議事堂 (Parliament) があり、この国会議事堂から北の方に直線距離にして 1.5 キロほどの Sussex Dr. にカナダ総督の公邸「リドー・ホール」(Rideau

Hall) がある。1867 年のカナダ建国以来、総督がここで暮らしている。

現在 (2014 年 3 月時点)、カナダ総督は第 28 代目となり、デイヴィッド・ロイド・ジョンストン氏 (David Lloyd Johnston) が務めているが、筆者がトロントのヨーク大学に研究員として滞在していた頃は黒人としては初めてで、女性としては 3 人目のミカエル・ジャン氏 (Michaëlle Jean) が第 27 代総督 (任期 2005 年 9 月 27 日～2010 年 10 月 1 日) を務めていた。

余談になるが、ヨーク大学留学中、6 月 19 日から 22 日までオタワに出かける機会があり、その帰りの日にリドー・ホールを見学に行き、幸運にも偶然、閱兵式から戻って来たばかりのミカエル・ジャン総督に出会った。

たまたま小学生の団体が遠足に来ていて、公邸の噴水前で記念写真を撮っていたところ、総督が気さくにも飛び入りで記念写真に加わった姿を目

にし、慌てて上掲の 13、14 のような写真を撮った。ほんのわずかな時間だったが、この後、総督は傍らの筆者と家内にも手を上げて挨拶をし、公邸に戻って行った。筆者には思い出の写真である。

4. カナダ人の国民性点描

カナダ人の典型的な国民性を表していると思われることの 1 つに、「自分たちはカナダ人であり、隣国のアメリカ人とは違う」という強い意識があるようだ。例えば『暮らし方』には、年輩のカナダ人が旅行する際に、カナダ国旗のピンバッジを付けて、旅の先々で自分がカナダ人であることを誇らしげにアピールする (コラム「アメリカ人ではない」同書、p.218) と紹介している。

確かに、自分たちカナダ人をアメリカ人と同じに見てほしくないという意識は、ちょうど私たち日本人が海外に出て中国人や韓国人と間違われて



写真 15 カナダ・デーを祝う North York の会場
(2010 年 7 月 1 日撮影)



写真 16 いただいたカナダ国旗の飾り付き麦藁帽子
(2010 年 7 月 1 日撮影)



写真 17 配られたカナダ国旗の小旗
(2010 年 7 月 1 日撮影)

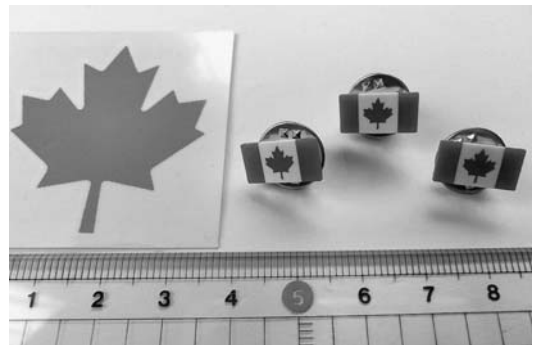


写真 18 配られたカナダ国旗のシールとピンバッジ
(帰国後に撮影)

「いいえ、私は日本人です」と言いたくなる気持ちに似ている。

このようなことを思うに至ったのは、様々な祝祭日の行事やイベントに参加すると、必ずカナダ国旗のマークが入った小物や、カナダ国旗のピンバッジとか手や腕に貼るシールを参加者に無料で配っているからである。写真 16～18 は、筆者自身がカナダ・デーやプライド・パレードなどの会場で貰った国旗の小旗、ピンバッジ、シールである。さらにまた、カナダ国旗の飾りが付いた麦藁帽子を貰ったこともあった。

日本では、一般のイベントや催し物の会場で国旗を配るなど、あまり聞いたことがない。

5. VIA 鉄道の車内照明から見て来るカナダ人の暮らしぶり

カナダの国土は広く、長距離の移動は空路が最

適であるが、あえて鉄道を利用する人も多い。時に旅行距離によっては、何日も車内で過ごすことになる。このような長距離鉄道では、辺りが薄暗くなる時刻に車内の照明が一斉に落とされる。このような時、日本の鉄道との違いを感じる。

たとえば航空機を利用する時、人が寝る夜間に照明を消すことは、当然の配慮であり、少しも違和感はないが、カナダの VIA 鉄道の車内では、まだ寝る時間でもないのに、周りが薄暗くなると、一斉に車内の照明を落として暗くすることに、日本との大きな違いを感じた。

もちろん車内は飛行機の機内のように、それぞれの座席に専用の読書灯が付いていて、周りが暗くても本を読んだり、ちょっとした作業くらいは出来るので、特に不便は感じないが、まだ寝る時間でもないのに、目的地に到着するまで、一斉に照明を落とすことが不思議でなかった。トイ



写真 19 VIA 鉄道でケベックのパレ駅に到着
(2010 年 4 月 29 日撮影)



写真 20 座席の足下にフットライトがある
(2010 年 8 月 10 日撮影)



写真 21 天井にライトがなく、スタンド・ライトのみのリビング (2010 年 3 月 31 日撮影)



写真 22 天井のライトで、明るいキッチン
(2010 年 4 月 4 日撮影)

レに行くにも薄暗がりの中、足下を照らすフットライトの灯りを頼りに通路を移動しなければならない。

しかし、以前に暮らした米国でも英国でも、またこのカナダでも、一般に自宅のリビング・ルームは、日本のように天井にシャンデリアやライトを付けず、たいてい部屋の片隅にスタンド・ライトを置いて、部屋全体を薄明かるくしてつろぐ家庭が多かったことを思い出した。拙稿「イギリス英語の背景—イギリス人の暮らし—」（2009）を参照のこと。もちろんダイニングやキッチン天井にはライトを付けて、とても明るくしている。

このようなことを思い出し、VIA 鉄道の内車で、まだ人が寝る時間でないのに、目的の駅に到着する直前まで、車内の照明を落とすことに、日頃、居間でつろぐ時の日本人との相違を改めて感じた。

6. カナダの遊園地

大勢の人々が集い、楽しむ遊園地は、どの街にもあるが、単なる遊戯場ではなく、マクロの目で見れば、その街や地域の活性化を促進し、ひいては経済効果さえももたらす、たいへん意義のある施設だと言える。したがって、それぞれの「遊園地」を様々な角度から眺めると、単に遊戯場の比較に留まらず、その街や地域の文化的、経済的、諸々の特徴を浮き彫りにすることにもなる。

そのような観点から、筆者が実際に訪れたカナダの、特にトロント周辺の主な遊園地をいくつか取り上げることにするが、紙幅の都合でここに取り上げられないものについては、いずれ稿を改めて論じたい。

6.1 カナダの遊園地（その1）：カナダズ・ワンダーランド

最初に、カナダ最大の遊園地「カナダズ・ワンダーランド」（Canada's Wonderland：9580 Jane St. Vaughan）（以下、「ワンダーランド」と略す）を取り上げる。

ワンダーランドは、創立以来、経営者が2度替わり、まず1994年にParamount Parks社に替わったので、2006年まで遊園地の正式名が「Paramount Canada's Wonderland」と称されたが、2006年に再び経営者がCedar Fair社に替わり、それ以来、正式名称も「Canada's Wonderland」となって現在に至っている（Wikipedia 英語版の「Canada's Wonderland」の項目を参照）。

日本で出版されているカナダ旅行のガイドブックは枚挙に暇がないが、地元の人たちの人気という点でも、規模の点でも、日本におけるディズニーランドに匹敵する遊園地でありながら、このワンダーランドを紹介しているガイドブックは『地球の歩き方—カナダ東部—』や『ワールドガイド：カナダ』など、ごく限られており、また内容も7～8行の僅かな紹介でしかない。したがって、日本からトロントに観光に来て、ワンダーラン



写真 23 ワンダーランドの案内図（Canada's Wonderland Park Guide 2010 より）



写真 24 チケット売り場で当日券を求める人々
(2010年8月28日撮影)



写真 25 園内の中世ゾーンへの入り口
(2010年8月28日撮影)



写真 26 夏季のみ開かれるプールの一部
(2010年8月28日撮影)



写真 27 大人気の木製コースター「Mighty Canadian Minebuster」(2010年8月28日撮影)

ドを訪れる人はほとんどいないと思われる。

このワンダーランドは1981年5月23日にトロント市の郊外、Vaughan に作られた。

とにかく広大な敷地に膨大な数の乗り物やアトラクションが8つのゾーンに分けて配置され、さらに夏季には Splash Works というゾーンに Splash Island Pool というカナダ最大の、人工の波があるプールも開かれる。

130ヘクタールにも及ぶ広大さは、数字では実感しにくいですが、例えば千葉県浦安市にある東京ディズニーランド(51万平方メートル=51ヘクタール)の2.5倍以上あり、大阪市此花区桜島にあるユニバーサル・スタジオ・ジャパン(USJ:39ヘクタール)の3.3倍以上もある。

日本の遊園地とは大きく異なり、開園期間が短く、およそ半年以上、閉園し、毎日、営業しているのは夏期のみで、冬期は完全に閉園し、春・秋

期も土・日曜しか開いていない。いくら冬が寒いとは言え、日本の遊園地と比べると、春・秋期にもっと開園日を増やすべきではないかと思われる。これだけの規模の遊園地だから集客力があり、地元の人たちだけでなく、広く海外からの客も呼べるし、経済効果も上がるに違いない。

入園料もずいぶん安く、筆者と家内は60歳以上のシニア料金だったので、一人、税別31ドル99セントで入園した。この料金は全ての乗り物、アトラクションにもフリーパスとなっていた。ちなみに年間のフリーパス券でさえ60ドルほどで、日本のUSJなどの1日の入場料に相当する料金で一年間フリーパスとなる。このような低料金で一年の半分を閉園しているのでは、とても採算が合わないのではないかと心配になってしまう。逆に見方を変えれば、年間パスと言っても一年の半分以上も使えないので安くしているのかもしれない

い。様々な割引もあるので、料金の詳細については、ワンダーランドの公式ウェブ・サイトを参照されたい。

次に遊園地の立地に目を移すと、ここは決して便利とは言えず、トロントの中心街、例えばユニオン駅辺りから車を飛ばせば、道路の渋滞がない限り 30 分程度で到着できる所だが、電車の駅はないし、公共の交通機関を利用して行くには極めて不便な場所と言わざるを得ない。この不便さゆえに、もっと便利な遊園地の方に足が向いてしまうことになりはしないだろうか。

公共の交通機関を利用しようとすると、電車や地下鉄の駅が近くにないので、唯一、TTC とは別の GO Transit が開園日のみ、地下鉄の York-

dale 駅、または York Mills 駅からワンダーランドまでの直通バスを運行しているので、どちらかの地下鉄駅まで行って GO Transit バス（これ以降「GO バス」と略称）に乗るしかないが、地下鉄の路線から見ると U 字形の路線上にあって、ぐるりと路線をほぼ一周するのでたいへん時間がかかるが、地図上では両駅は近いので、この付近の住民には便利でも、離れた所に住んでいれば、駅が 2 つ選択肢としてあっても、どちらの駅も同じように時間がかかる。しかも、GO バスは走行距離に応じて乗車料金が上がるのに対して、TTC は、全て均一料金で、しかもあらゆる路線のバスも地下鉄も路面電車も transfer で制限時間内なら乗り換え自由なので、GO バスより、ずっと経済

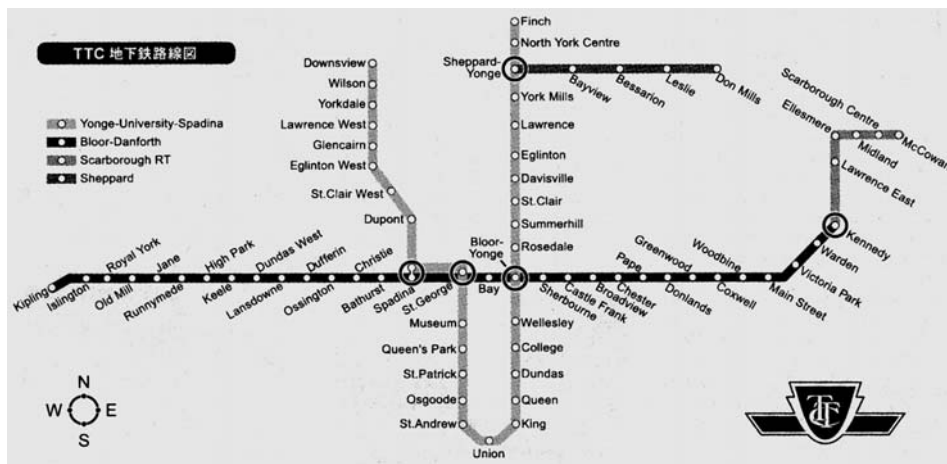


写真 28 TTC 地下鉄の路線図 (bits TOWN 2012-2013 より)

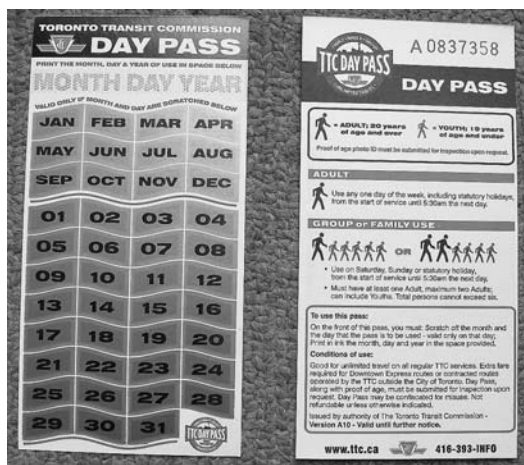


写真 29 TTC のワンデイ・パス
(2010 年 8 月 18 日撮影)



写真 30 ヨーク大学キャンパスを行く GO バス
(2010 年 8 月 16 日撮影)

的である。

そこで調べてみると、TTC が夏期のみ限定で 165 A バスをワンダーランドまで運行していることが分かり、ヨーク大学のアパート (2 Passy Crescent) の最寄りバス停「Sentinel」から TTC バスを乗り継いでワンダーランドに行くことにした。transfer を使うと、帰りにまた新たに乗車券を買うことになるので、実際には、あらかじめ買っておいたワンデイ・バスを利用した。

結局、自宅アパートを出て、約 1 時間半後にワンダーランドに到着できたが、公共の交通機関を利用してワンダーランドに行くには、よほどバスや地下鉄の路線を熟知していなければ難しい。

とにかく、交通の不便さはあっても、130 ヘクタール、つまり約 133 万平方メートルもの広大な敷地を 8 つのエリアに分けて、現在、ゲームやくじ引きなども含め 200 以上のアトラクションと、60 以上の乗り物が楽しめる。写真 23 の園内案内図を参照のこと。

入場者数を見ると、年間 365 万 5 千人 (2012 年度) は、例えば、遊園地の入場者数で世界のトップ 10 に入る大阪 USJ の 975 万人 (2012 年度) に比べて一見、少なく見えるが、ワンダーランドの開園期間が圧倒的に少なく、USJ の入場者数が年間 365 日の延べ人数であるのに対して、ワンダーランドは 5 月中・下旬に始まり 10 月の中旬までしか開園せず、しかも 7・8 月以外は週末の土・日曜しか開園しないので、おおよそ年間 85 日しか開園していないから、実質の 1 日当たりの入場者数から見れば、USJ が 2 万 6 千 7 百人で、一方、ワンダーランドは 4 万 2 千 5 百人となり、ワンダーランドの方が USJ の 2 倍近い入場者数を持つことがわかり、ワンダーランドが圧倒的な集客力を誇っている。

なお、個人的な感想に過ぎないが、園内のエリアや乗り物の配置には十分な工夫、配慮がなされていて、日本を含めて他の遊園地では乗り物から次の乗り物へ移るのに、ずいぶん離れている所が多いのに、ワンダーランドは乗り物やゾーンの配置への十分な気配りにより、効率よく、次々と乗り物やアトラクションへ移って行けるように思われた。

6.2 カナダの遊園地 (その 2) : オンタリオ・プレイス

オンタリオ・プレイス (Ontario Place : 955 Lake Shore Blvd. West) は、ワンダーランドに比べて、遙かに交通の便が良く、トロントの中心街に大変近い遊園地である。トロントの地元住民、いわゆるトロントニアンにも好評で、筆者もヨーク大学に研究員として滞在中に評判を聞き、帰国間際の 2010 年 9 月 18 日 (土曜) に、後学のためここを訪れ、たいへん気に入ったが、残念ながらその後、2012 年 2 月 1 日付けをもって閉園となった。

しかし、1971 年 5 月 22 日の開園以来、40 年余も地元住民に親しまれて来た遊園地であり、さらにまた、カナダ独立 150 周年 (英国の植民地から 1867 年に英国連邦の自治領となった) を迎える 2017 年を目標に再開発されるらしく、いずれまた装いも新たにお目見えするという事なので、ここで取り上げることにした。

ここは、地元の憩いの場であるオンタリオ湖畔のハーバー・フロントの西端に造られた人工島にあり、ダウントウン (例えばユニオン駅辺り) から約 4 キロという近場で、大きな駐車場があるので、車はもちろん、シーズン中は無料のシャトル・バスが朝 8 時半から夜の 8 時半まで 1 時間ごとに毎日、運行している。また、公共の交通機関も便利で、様々なルートがあるが、まずは Exhibition Place (博覧会場) 駅へ向かい、博覧会場を通り抜けて徒歩 10 分ほどで、すぐにオンタリオ・プレイスの玄関に続く陸橋に出る。ユニオン駅周辺からならば、TTC の路面電車でもバスでも、また GO transit の電車でも行ける。

場所はオンタリオ湖の湖岸に造られた 3 つの人工島を橋で結んだ形をしているが、広大な面積は 38 ヘクタールもあり、大阪の USJ に匹敵する広さを誇っている。

園内は「アドベンチャー島」(Adventure Island)「マリーナ・ビレッジ」(Marina Village)「チルドレンズ・ビレッジ」(Children's Village) の 3 つの島に分かれている。多くの乗り物があり、ドーム型パビリオンでは超大画面の IMAX 映画が上映され、野外コンサート場も備えているので、小さな子供から大人まで一日中、楽しめる遊園地である。



写真 31 Exhibition Place 駅の看板
(2010年9月18日撮影)



写真 32 Exhibition Place を通り抜ける
(2010年9月18日撮影)



写真 33 オンタリオ・プレイスの案内図 (Ontario Place 2010 Park Guide より)



写真 34 入場口へと続く陸橋からの眺望
(2010年9月18日撮影)



写真 35 園内の一風景
(2010年9月18日撮影)

料金は安く、65歳以上対象のシニア料金など、各種の割引があるが、当日、普通の大人料金として、入場料プラス乗り物・アトラクションにフリーパスで、31ドル90セントだった。

特に毎年7月1日のカナダ・デー（建国記念日）には大規模な打ち上げ花火の会場になることでも有名であるが、年間の開園期間となると短く、9月中旬から翌年5月中旬の冬季は閉園で、開園の期間も、毎日やっているのは7・8月だけで、これ以外は週末の土・日曜のみである。

6.3 カナダの遊園地（その3）：トロント・アイランドとセンターヴィル・アミューズメントパーク

トロントの地元住民の生活を潤してくれるハー

バー・フロント地区は、この地区自体が人工の砂浜やボードウォークを備え、さらには野外コンサートなどの会場もあり、オンタリオ湖の周遊クルーズなど、様々に楽しめ、憩えるオアシスのような場所であるが、ここからフェリーや水上タクシーで約10分の距離にあるトロント・アイランド（Toronto Island）は、島全体が公園になっている。

島では散歩やバード・ウォッチングなど、またサイクリングやテニス、さらには魚釣りやヨット、ボート、カヌーなどのマリン・アクティビティをはじめ、様々なスポーツが楽しめるほか、センター・アイランドのフェリー乗り場を降りてすぐに「センターヴィル・アミューズメントパーク」（Centreville Amusement Park）という遊園地



写真36 トロント・アイランドの案内図（Toronto Island Park Guide 2010 より）



写真37 CNタワー展望台からトロント・アイランドを望む（2010年7月15日撮影）



写真38 Westin Harbour Castle Hotelの客室から眺めるフェリーとトロント・アイランド（2010年9月17日撮影）



写真 39 Centreville Amusement Park の看板
(2010 年 9 月 17 日撮影)



写真 40 様々な貸し自転車も楽しめる
(2010 年 5 月 4 日撮影)



写真 41 ハーバー・フロントのフェリー乗り場
(2010 年 5 月 4 日撮影)



写真 42 センター・アイランドのフェリー乗り場
(2010 年 5 月 4 日撮影)

があり、各種の乗り物がある。

トロント島のフェリー乗り場は3カ所あり、約300世帯が暮らす住宅地（Wikipedia 英語版を参照）のあるワーズ・アイランド・フェリー乗り場、島全体が公園や遊園地であるセンター・アイランド・フェリー乗り場、小型プロペラ機専用の空港「ビリー・ビショップ・トロント・シティ空港」もあるハンランズ・ポイント・フェリー乗り場である。

ハーバー・フロントのフェリー乗り場（Mainland Ferry Terminal : Bay St. Queen's Quay W.）は、ダウンタウン、例えばユニオン駅から300メートルほどの至近距離にあり、ウェスティン・ハーバー・キャッスル・ホテル（Westin Harbour Castle Hotel）の隣にある。

フェリーの往復運賃は現時点で大人7ドル、65歳以上のシニアと19歳以下の学生は4ドル50セ

ント、14歳以下は3ドル50セント、2歳以下は無料という格安で、ちょっと散歩でトロント島に足を延ばす、という感覚で気軽に利用できる。

乗船時間は、ほんの10分程度なので、地続きの公園と何ら変わらず、その一方で短時間ながら船旅が味わえるという、トロントの地の利を最大限に利用した公園、遊園地として、誰からも好まれ、親しまれている憩いの場所である。

なお、「センターヴィル・アミューズメントパーク」については、開園期間が毎年5月1日から9月末までとなっており、5月と9月は土・日曜のみ、6月から8月は毎日開園しているが、10月から翌年の4月いっぱいはい休園している。

6.4 カナダの遊園地（その4）：ブラック・クリーク・パイオニア・ビレッジ

ヨーク大学のキャンパスの西隣に「ブラック・クリーク・パイオニア・ビレッジ」（Black Creek



写真 43 パーティーなどへの利用を呼びかける看板
(2010 年 5 月 14 日撮影)



写真 44 園の入口で
(2010 年 5 月 24 日撮影)

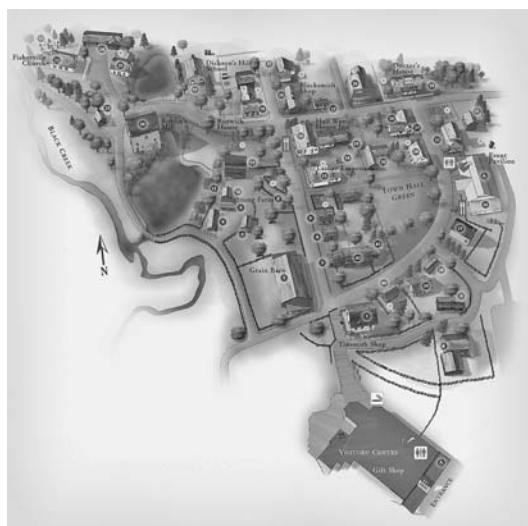


写真 45 パイオニア・ビレッジの案内図
(Visitor's Guide 2010 より)



写真 46 園内各所にアリスの登場人物が現れた
(2010 年 5 月 24 日撮影)

Pioneer Village: 1000 Murray Ross Parkway) (以下、「パイオニア・ビレッジ」と略す) というテーマ・パークがあり、ここは Steeles Ave. と Jane St. の交差点になるが、大学キャンパスの一角を散策するような気分で、散歩して行ける。ダウントウンからだ、TTC 地下鉄の Finch 駅から #60 のバスに乗り、Jane St. で下車して 10 分ほど歩くか、あるいは Jane 駅から #35 のバスに乗って行くこともできる。

このパイオニア・ビレッジの特徴は、1860 年代のオンタリオ州の生活を再現したテーマ・パークということだが、当時の生活を単に見せたり、紹介するだけでなく、実際に様々な作業を体験さ

せてくれる体験型の教育施設の顔も併せ持っている。

特別な乗り物類はないが、1860 年代当時の服装で、水車を利用した粉ひき、鍛冶屋、靴屋、酒造、パブ、レストラン、教会等々の様子を見せてくれたり、しばしば園内で、親子連れが楽しめる劇を上演している。筆者は「Victoria Day」(ビクトリア女王誕生祭) の祭日 (5 月 24 日) に訪れたが、ちょうどこの年 (2010 年) には、5 月 22 日 (土曜) から 24 日 (月曜) の 3 日間、「不思議の国のアリス」の特別イベントをやっていて、子供向けの劇を上演するだけでなく、劇の時間外には、登場人物やキャラクターが園内の各所に現れ



写真 47 園内の一風景
(2010年5月24日撮影)



写真 48 当時の消防車も展示されている
(2010年5月24日撮影)

て、子供たちを大いに喜ばせていた。

開演期間は5月1日から暮れの12月23日までで、12月24日から翌年の4月末日までは休園となるが、年間を通じ、学校の行事や地元住民の結婚式や各種パーティーであれば、いつでも利用できる。つまり地域密着型であり、教育施設・文化施設型のパークと言える。

子供連れでない近所の大人たちは、散歩がてら立ち寄り、昔懐かしい建物の中で地ビールや食事を楽しむ姿がよく見られた。

この日、天気予報では最高気温25度と出ていたが、空もよく晴れ、日なたはおそらく摂氏30度近くまで気温が上がっていたものの、オンタリオ湖から吹く風が涼しく、昔のオンタリオにタイム・スリップして、当時の生活や村の風景を十分に満喫した。

7. 拙稿「トロントには日本人街がない」(2012、第7節)への補遺

拙稿「カナダ英語の背景—カナダの暮らしと言語(その3)—」の第7節(2012:72-75)で、トロントに、さらにはカナダ全体を見渡しても、モザイク都市トロントとか移民の国カナダと言われながらも、例えば米国ロサンゼルスのリトル・トーキョーや同じくサンフランシスコのジャパントウンのような所謂「日本人街」がないことを取り上げたが、その理由については筆者の専門外でもあって、トロントで長く日本の食料品店「サンコー」を営むウィリアム水野氏との四方山話などを情報源として、若干の私見を述べるに止めた。

しかし、その後、カナダの日本人移民を取り上げた新保(1986)や、第二次世界大戦中のカナダにおけるカナダ人と日本人の関係を論じた飯野、他(1994)などに接する機会を持って、これまでのカナダにおける日本人の歴史は、決して順風満帆ではなく、不遇の時代、暗闇の時代、被差別の時代を経て現在に至っていることを改めて実感し、なぜ今、トロントに、さらにまたカナダに、いわゆる「日本人街」と公称できる地域が存在しないのかという疑問に対して、すでに述べた私見を一層、確信したので、それらをここに付記したい。

ごく簡単に要点だけを述べるに止めるが、日本からの「カナダ移民第1号は1877年の長崎県出身・永野万蔵の非合法入国だとされ」(同書、p.29)、バンクーバーに「1880年代末には200名ほど」住んでいた(同書、p.32)。このような日本人がバンクーバーのパウエル街に集まり「日本街」と呼べるコミュニティを作ったが、「1907年に排日の機運が高まり、9月7日にはヴァンクーヴァーに暴動が起こって、日本街と中国人街を荒らした」(同書、p.57)が、この頃には「1907、8年ころのヴァンクーヴァー同胞の職業分布は以下の通りである。(中略)一部下宿と一部雑貨屋をのぞいて、日系人のみを相手に商売していた。日本街では日本語だけで用が足り、日系人がおたがいにサービスを提供しあっていたのである」(同書、pp.57-58)とあるように、戦前のカナダ、厳密にはバンクーバーのパウエル街を中心に、人種差別や偏見を受けながらも、日本人街を築いて



写真 49 ケベック州議事堂前の台座に碑文がある
(2010 年 5 月 1 日撮影)

いたと言えるが、1920 年代の厳しい移民規制で移民が増えず、さらに第 2 次世界大戦で敵国となった日本の移民者は 1941 年 12 月 7 日の真珠湾攻撃に始まる開戦後間もなく、「内陸部へ日系人立ち退きの決定」(飯野、他、pp.93-126)という形で強制移動させられたので、終戦の頃にはバンクーバーには一人も日系人がいなかったらしい。戦後に日本人移住者がカナダに来たのは 1965 年にカナダの移民法が改正されてからのことだと言う。

このような史実に触れれば触れるほど、日本人が自分達の街を易々と築けるような状況ではなかったことを一層、痛感する。

8. 拙稿『「Je me souviens」—ケベック州の車のナンバープレートの刻印—』(2013、第 4.4 節)への補遺

拙稿「カナダ英語の背景—カナダの暮らしと言語(その 4)—」の第 4.4 節(2013: 67-68)で、車のナンバープレートに刻印された「Je me souviens」(私は忘れない)というモットーにも、紆余曲折のケベックの歴史、ひいてはカナダの長い歴史が伺えると述べたが、このケベック州のモットー「Je me souviens」の由来については、ケベック州の公式 Web サイト「Province Quebec」に詳しいが、この他にも、ここに掲載の写真 50 のよ

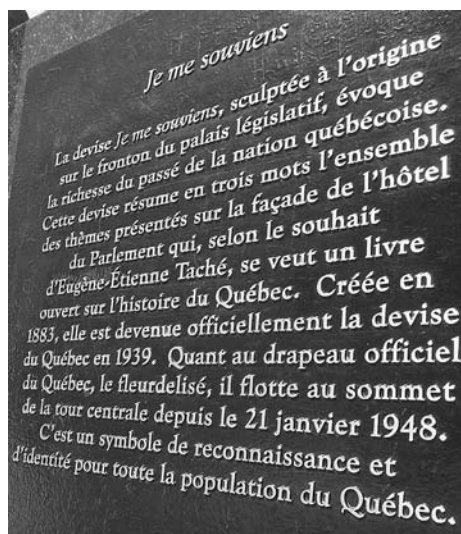


写真 50 モットー「Je me souviens」を解説する碑文
(2010 年 5 月 1 日撮影)

うに、現在、ケベック州議事堂の正面に建てられた台座の碑文に詳しい解説がフランス語で刻まれている。

III むすびに

以上、一連の拙稿(2011, 2012 a, 2012 b, 2013)に続いて、本稿は、言葉の背景を見ることによってカナダ英語をさらによく理解するために、トロントでの体験や知見に基づいて、カナダの言語や暮らしに関わるトピックをいくつか、許された紙数の中で取り上げた。従来の限られた知識や巷間の情報を少しでも補完したいと願ってのことである。もちろん限られた紙数ゆえに取り上げられなかったことが多いので、今後も機会を捉えて、さらに続編を公にしたい。

参考文献

- (紙幅の都合により、本稿で直接引用したもののみ)
- 浅田壽男. 2009. 「イギリス英語の背景—イギリス人の暮らし—」『言語理論の展開と応用—西川盛雄教授退官記念論文・随想集—』pp.5-18. 東京: 英宝社.
- 浅田壽男. 2011. 「カナダ英語の背景—カナダの暮らしと言語(その 1)—」『社会学部紀要』第 112 号(大村英昭教授退職記念号) pp.55-62. 関西学院大学: 社会学部研究会.

- 浅田壽男. 2012 a. 「カナダ英語の背景—カナダの暮らしと言語（その3）—」『社会学部紀要』第114号（高坂健次教授退職記念号）pp.65-77. 関西学院大学：社会学部研究会.
- 浅田壽男. 2012 b. 「カナダ英語の背景—カナダの暮らしと言語（その2）—」『21世紀英語研究の諸相—言語と文化からの視点—』（八木克正教授定年退職記念論文集）pp.466-479. 東京：開拓社.
- 浅田壽男. 2013. 「カナダ英語の背景—カナダの暮らしと言語（その4）—」『社会学部紀要』第116号（八木克正教授退職記念号）pp.63-70. 関西学院大学：社会学部研究会.
- 飯野正子・高村宏子・P. E. ロイ・J. L. グラナスティン. 1994. 『引き裂かれた忠誠心—第二次世界大戦中のカナダ人と日本人—』京都：ミネルヴァ書房. [飯野、他]
- 伊丹レイ子. 1980. 「カナダの英語」『時事英語研究』第34巻第12号（1980年3月号）pp.28-34. 東京：研究社.
- 新保満. 1986. 『カナダ日本人移民物語』東京：築地書館.
- 上山泰・井上澄子. 1993. 『イギリス風物誌』東京：篠崎書林.

辞書・雑誌類

- Oxford Advanced Learner's Dictionary of Current English*. 2005. 7th edition. [OALD 7]
- 『地球の歩き方』編集室（編）. 2002. 『地球の歩き方（86）カナダ東部2002～2003年版』東京：ダイヤモンド・ビッグ社. [『地球の歩き方—カナダ東部—』]
- 『地球の歩き方』編集室（編）. 2006. 『地球の暮らし方（7）カナダ2006～2007年版』東京：ダイヤモンド・ビッグ社. [『暮らし方』]

- 『ワールドガイド：カナダ』2008. 東京：JTB パブリッシング.
- bits TOWN*. 2010-2011 vol.2. (June 30, 2010) Toronto : Bits Box Inc.
- bits TOWN*. 2012-2013 vol.4. (June 30, 2012) Toronto : Bits Box Inc.
- Black Creek Pioneer Village Visitor's Guide*. 2010. Toronto : Toronto and Region Conservation Authority.
- Canada's Wonderland 2010 Park Guide*. Toronto : canadaswonderland.com.
- Ontario Place 2010 Park Guide*. Toronto : ontarioplace.com.
- Toronto City Guide—The (i) on Toronto—2010-2011*. Toronto : Shop・Dine・Tour.
- Toronto Island Park Guide 2010*. Toronto : Toronto. ca/parks.

インターネット Web サイト

- Province Quebec Web Site（ケベック州公式サイト）
http://provincequebec.com/info_quebec/motto-license-plate/
 [2013年8月26日]
- Wonderland Official Web Site（ワンダーランド公式サイト）
<https://www.canadaswonderland.com/>
 [2013年8月26日]
- Wikipedia フリー百科事典 日本語版
<http://ja.wikipedia.org/wiki/ユニバーサル・スタジオ・ジャパン>
 [2013年8月26日]
- Wikipedia, the Free Encyclopedia（Wikipedia フリー百科事典 英語版）
http://en.wikipedia.org/wiki/canada's_Wonderland
 [2013年8月26日]

A Background Study of Canadian English

—Canadian Daily Life and Language (5)—

ABSTRACT

A more complete understanding of the background of language will be effective in any approach to the grammar and usage of language. In a series of my papers (2011, 2012 a, 2012 b, 2013), we have argued that daily life in Canada – from the author’s personal experiences and knowledge from having lived in Toronto, Canada – will help in an understanding of Canadian English.

From March to September in 2010, the author was able to live and study in Toronto, Canada as a visiting research scholar at the Department of English, the Faculty of Liberal Arts and Professional Studies, York University, with financial support from Kwansei Gakuin University.

Toronto, the largest city in Canada, is fairly close to Ottawa, the capital city, and is situated only a few hours from the French/English bilingual region of Quebec. It also has excellent transportation links to other areas in Canada, making it one of the best areas for the study of Canadian English.

Daily life and research at York University was most useful, and the author was able to gain many valuable insights into the culture of the Canadian people, as well as discovering many things not known here in Japan before.

The present paper deals not only with Canadian English but also with Canadian culture, involving a number of aspects of everyday life in Canada including the manners and customs of the Canadian people. The topics I deal with are (1) American English expressions in Canadian English such as “simplification of spellings,” “*take out* or *to go*,” “*diaper*,” and so on; (2) meanings of *promotion*; (3) Canadian form of government including *Michaëlle Jean the Governor General*; (4) a sketch of characteristics of the Canadian; (5) railway coach lighting in Canada; (6) amusement parks in and around Toronto; (7) an addendum to my previous paper (2012); (8) an addendum to my previous paper (2013). It may safely be said that these topics are explored from points of view not well known here in Japan.

Daily life in Toronto showed the author a number of real images and actual situations of life in Canada that are not well known in Japan. In addition, the author has been inspired to study the background so as to have a better understanding of Canadian English.

It is hoped that the papers the author is currently writing on the background of Canadian English will add to the information already known, and will lead to a more complete understanding of the language as well as daily life in Canada.

Key Words: Canadian English, Canadian daily life, Canadian culture and tradition